

氏名	もり おか くに やす 森 岡 邦 泰
学位(専攻分野)	博 士 (経 済 学)
学位記番号	論 経 博 第 272 号
学位授与の日付	平 成 14 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	自 然 と 社 会 ——フランス啓蒙思想研究——

論文調査委員 (主 査)
教 授 田 中 秀 夫 教 授 八 木 紀 一 郎 教 授 根 井 雅 弘

論 文 内 容 の 要 旨

本論文はフランス啓蒙思想の「自然」観と「社会」観を機械論的思考様式として、すなわち機械論的モデルの適用の試みとして統一的に把握しようとする研究であり、序章と5章とからなる。

「啓蒙思想の何が問題か」と問い掛ける序章は、まず機械論哲学を人文・社会科学に適用したときに生ずる問題点として、6点を挙げる。その6点とは、要因の選択の是非、要因の数量化、公理の選択の是非、恣意的な定式化、人間の単純化、因果関係の蓋然性である。そしてそのような問題点が啓蒙思想の基本問題において露呈すると著者は主張する。啓蒙思想の基本問題、すなわち機械論的思考様式が啓蒙思想において提起した問題とは、著者によれば次の4つである。A 物質と生命と精神、B 法と法則、C 自由と必然、D 認識論的錯誤。

このような問題設定から出発した著者は、自説を具体的に展開・論証すべく、ケネー、デイドロ、ドルバック、ラ・メトリ、そしてコンドルセを順に取上げ、簡潔に論じる。

第1章のケネー論において、著者はまず機会原因論で知られるマルブランシュから議論を始め、マルブランシュにあっては神の恩寵も自然も機会原因という同一原理によるとされ、しかも機会原因は人間理性によって理解できるとされており、デカルトに始まる機械論的思考が頂点に達したと説く。このようなマルブランシュ的な世界の多様性の単一原理への還元、質の量への還元という思考を継承したのがケネーである(Bの問題)。こうして著者は『明証論』から『中国の専制論』、『経済表』にいたるケネーの思想体系の特徴を数量的合理性へのドグマチックなまでの信頼に見いだす。そして著者によれば、農業のみを生産的とするケネーの結論は当時も疑問が唱えられたにもかかわらず、表の体系的合理性が疑問を圧殺するとともに、そのような思考はさらにはイーデン条約によるイギリス製造業への敗北の原因ともなった(Dの問題)のである。

第2章は、AとCの問題を考え抜いた思想家としてデイドロをとらえる。デイドロは唯物論者として物質から「普遍的感性」の概念によって生命を構成し——石も感じる——、さらに「無機物の物質がある仕方で配列され、もう一つの無機質の物質がそこに浸透すると、熱と運動が加わることによって、感性や生命や意識や思惟が得られる」と語るデイドロは、人間の精神活動を感性ある分子から構成された網の目の運動として把握した。このように物質から精神を演繹するデイドロは、世界を連続の相でみる。連続性の志向がデイドロの自然観を特徴付ける。従って、予想されるように、デイドロは当然、決定論に立つが、決定論は人間の自由や道徳について難問に出くわす。ルソーは決定論を退けたが、デイドロは柔らかな決定論に立ったと著者は解釈する。それは、例えば、人間が食事をすることは必然であるが、どんな食事をとるかは選べるし、善を成すか悪を働くかもかなりな程度選べるということである。

第3章のドルバック論の問題はA、B、Cである。A問題に対してドルバックは運動の概念を適用する。物質から生命への移行は、様々な物質が集合・結合して果たされる。人間の場合、食物を同化して人間機械が作られるが、それは分子の運動による。結合が熱を生み、熱によって非生命物質が生命に転化する。ドルバックによれば精神も物質であるが、それは脳の働きによる。では世界の多様性はどう説明されるのか。世界の多様性は結合の仕方の多様性によるとドルバックは言う。

そのような多様性にもかかわらず、自然界の存在はすべて共通の運動法則に従っている。引力と斥力、慣性、必然の法則である。しかし、人間の自由については、ドルバックもまた柔らかな決定論をとった。ドルバックは政治、社会、道徳を論じる場合、功利主義を導入した。人間の行動の動機は利益であり、善は有用性である。快楽を求め、苦痛を避ける人間は、自分と仲間の幸福を求める存在である。したがって、それに反する人間を処罰することは正当である。唯物論から出発したドルバックは功利主義によって、決定論、宿命論の隘路を回避したのである。

ラ・メトリ（第4章）の問題もA、Cの問題である。「人間は極めて複雑な機械である」と言うラ・メトリもまた物質から生命の発生を説こうとして、物質の延長、活動性、感受能力を援用したが、後者をそれ以上に掘り下げることができなかった。ラ・メトリはデイドロの分子生物学の試みは放棄し、解剖学の所見から人体は自動機械であると言うにとどまった。知覚は、外的対象からの刺激を感覚器官が受け取ると神経が振動して、脳に運動が伝わって生まれると言うが、魂については体質の概念に訴える。C問題についてラ・メトリは人間機械論の立場を徹底できなかった。結局、ラ・メトリは二元論であった。すなわち存在—自然—哲学—理性と区別して、道徳や社会の問題は、立法と政治の問題とした。

最後にコンドルセ（第5章）が登場する。数学者であったコンドルセは社会問題に蓋然性の概念を適用した先駆者である。確率論を社会に適用してコンドルセは死刑廃止論や、君主制の利点を論じたが、その社会数学は、結局は数学的确实性あるいは斉一性を社会現象にも求めるものであった。モンテスキューにとって法は様々な事物の関係であるから、演繹できるものではなかった。コンドルセにとっては反対に法は集団の全体の意思ではなく、自然権から、数学のごとくに演繹できるものでなければならなかった。同質の市民を作りだそうとしたフランス革命の精神の体现者であったコンドルセは、利害の対立を前提にする三権分立も退けた。社会問題への幾何学の援用を批判したコンドルセは現実感覚に恵まれていたとはいえ、確率論を裁判に应用する試みが示すように、D問題、認識論的錯誤を犯さなかったとはいきれない。

論文審査の結果の要旨

本論文はフランスの啓蒙思想を自然と社会への機械論的思考の徹底的な適用の試みとして解釈するものである。その場合、機械論哲学のもつ問題点を6点に整理し（要因の選択の是非、要因の数量化、公理の選択の是非、恣意的な定式化、人間の単純化、因果関係の蓋然性）、そのような問題点が啓蒙思想の基本問題と著者がみなす4つの問題（A物質と生命と精神、B法と法則、C自由と必然、D認識論的錯誤）の認識においていかに露呈しているかを究明しようとした点に独自性、獨創性があると言えよう。したがって、このような問題意識からケネー、デイドロ、ドルバック、ラ・メトリ、コンドルセの5人が分析対象として選ばれており、啓蒙思想の基本問題を解明するための必要十分な人選であるとされている。このような明確な問題意識に立った思想史として緊密にして簡潔な論文となっている。

全体として著者が問題とするのは啓蒙思想のこのような機械論的思考は、多様性と質的差異を特徴とする社会現象の認識にとって大きな限界があるにもかかわらず、そのような限界の意識は啓蒙思想家にはなく、彼らは自然法則と類似のものとして社会法則をとらえようとして、認識論的錯誤に陥ったということである。このような結論は常識の部類に属するが、著者の貢献と言うべき点は、上の6点の機械論の問題点と4点の啓蒙思想の基本問題とからなる分析枠組みを適用して、5人の啓蒙思想家の自然観と社会観を明快に分析してみせた点にある。

とりわけマルブランシュとの関連におけるケネーの体系の分析は『明証論』、『中国の専制』、『経済表』を貫く機械論的思考法の析出において啓発的であるし、またデイドロにおける分子生物学の試みの分析は説得的であり、社会科学のみならず自然科学にも深い造詣をもつ著者ならではの仕事として高く評価できるものである。またコンドルセの分析も社会数学の概念に即してその思想的営みを解釈するものとして、外国に先駆があるものの、興味深い議論となっている。ドルバック論とラ・メトリ論は、比較的平板な分析に終わっているという印象がぬぐえないが、それでも本格的に両者の唯物論哲学に取り組んだ研究としてユニークな意義をもっている。

しかし、本論文にはまたいくつかの不十分な点があることも指摘しなければならない。

第一に、著者は、主流派の経済学に限界があるという批判の意識が強く、その意識も手伝って、機械論的思考の問題点を批判してやまないのが、その結果、啓蒙の時代に機械論哲学が持っていた積極的意義が見えなくなっている。思想史研究としては機械論的思考が何をいかにして打ち破ったのかという歴史的な問題意識が必要であろう。

第二に、著者は機械論的思考を啓蒙思想の中核として注目するのであるが、しかし機械論的思考は17世紀にすでに確立した思考であって、それは18世紀にも有力でありつづけるけれども、18世紀の啓蒙思想家は文明の発展と腐敗といった問題に力点を移していったことは問題にされない。つまり盛期啓蒙にとっての基本問題が著者の分析枠組みからは抜け落ちてしまうのである。したがって、ヴォルテールは登場しないし、モンテスキューもルソーも本論文では脇役として少し姿を見せるにすぎない。それは偶然そうになったのではなく、問題設定自体からもたらされた結果である。

要するに著者の問題設定自体に啓蒙思想分析としての限界があるように思われるのであるが、著者にはそのような意識は希薄である。著者の問題設定は18世紀以上に17世紀に妥当するであろう。機械論哲学はガリレオ、ハーヴェイ、デカルト、ホップズ、ボイル、ニュートンたち17世紀の天才の哲学であった。18世紀になると機械論哲学は、一方では著者が問題にしたように、さらに推し進められ流布されるけれども、他方では、自然と社会の差異も問題になり、ビュフォンのような進化の思想やスミスやチュルゴのような生活様式の発展論も登場し、思想史の情景は相当に複雑になる。

けれども、思想史研究は著者が範をとるカッシーラーやボルケナウの時代に比べて格段に進んだのであるが、啓蒙思想を機械論的思考として捉える古典的な立場がまったく陳腐になってしまったというわけでもない。その点は本論文自体が証明していると言えよう。いずれにせよ、上述のような問題点を指摘しなければならないとはいえ、本論文はきわめて透徹した、洗練された分析を成し遂げており、18世紀フランス啓蒙思想の機械論哲学を研究するときには参照しなければならない必読文献となるであろう。

よって、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。なお、平成13年11月14日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。